



卷頭言

研究と費用

清水 富士夫*

数年前に、ある週刊誌に恐竜の生態がどこまで理解できているかという記事が掲載された。その記事によると、恐竜の研究者は世界中で100人程度であり、研究予算は年間数億円だそうだ。次の週にこの記事の読者評が掲載されたが、記事の内容に関する意見にまじって、一つだけ次のような内容の意見があった。それは“現在、世界の半数以上の人々が飢えに苦しんでいるのに100人の立派な科学者たちが数億円もの研究費を無駄に使いなんと不道徳なことであるか”というものである。

幸いにして、物理学や電子工学などの分野では、その発展がわれわれの生活を豊かにし、あるいは安全性を高めることに貢献してきたおかげでこのような非難を浴びることは希である。これを根拠に、研究者たちは自らの研究がいかに人類の福祉向上に役立つかを宣伝し、多額の研究費を獲得するのに成功してきた。彼らはそれなりの見返りを出資者たちに返してきたわけであるが、同時に、高額の研究費は高度な研究技術を生み出し、レベルの高い研究を行うために多額の研究費を必要とするようになってしまった。この結果、研究者たちは研究レベル維持のため、自分の研究がいかに社会の要求を満足させる可能性があるかを宣伝し続けなければならなくなってしまった。

しかし、すべての研究がこの目標にそって行われてきたわけではなかろう。単に好奇心にもとづき知的欲求を満足させることのみを目的にした研究もあったはずである。量子エレクトロニクスの分野でも、量子力学の教える不思議な性質に魅せられて小数自由度の光子が物質と強く相互作用している系の研究を行い、あるいは、ただひたすらレーザー安定化の極限を追及している人もあるのではないか。このような研究は、その価値に普遍的な判断基準があるわけではなく、将来何らかの実利的価値を生み出す可能性があると限ったものでもない。これは、もちろん出資者に対する約束違反である。しかし、多様な価値基準にもとづいて多様な“無駄な”活動をすることこそ人類の際だった特徴ではないであろうか。

それとも、つつましい恐竜研究者たちよりはるかに多額の研究費を使っているわれわれは、はっきりした社会貢献の意識を持って、より高速で大容量のディジタル通信網構築のために非古典統計光の研究を行い、より鮮明なディスプレーを作るために高性能な非線型光素子開発を行い、あるいは、枯渇に備えてより超高感度の資料探査が行えるように原子光学を利用した重力計の研究に専念しなければならないのであろうか。

* 東京大学工学部物理工学科 〒113 東京都文京区本郷 7-3-1